

四月十一日。震災から一ヶ月後。私は福島県いわき市にいた。福島第一原発の事故で被災した町を、ドキュメンタリー映画に記録するためだ。

事前の取材で、原発のある大熊町で半導体関連の工場を経営していた岩本久美さん（六五）と知り合つていた。その日は翌日、岩本さんが警戒区域内に入る日だった。避難先のいわき市で工場を再開するため、必要な資材を取りに自宅に戻ろうとしていた。

「帰宅」手順の確認をする岩本さんを取材していたその時、震度6弱の余震が発生。激しく揺れた次の瞬間、停電した。取材を切り上げて宿に向かつたが、信号が全停止し、道は大渋滞。激しい雷と豪雨にも襲われた。ラジオからは津波注意報の情報。津波が車や家をのみ込む震災当日の映像が脳裏をよぎつた。

旅館にたどり着けたのは一時間後。真っ暗な部屋、ことにした。余震や津波断水、絶え間ない余震。とにかく逃げられる格好で寝ることにした。余震や津波

で命を落とす恐怖と「余震で原発に何か起きているのでは」という不安で、まんじりともせず夜を明かした。

翌日、防護服を着て、第一原発から七〇の岩本さん

の工場を撮影。人けのない町。泥棒に襲われた家。取

り残された牛が、人恋しい

守るか、に直面した。

東京電力は五月になつて

震災直後のメルトダウンの

事実を発表。もし知つてい

たら、福島には通つていな

つ帰れるのか、そればかり

い。あの日、吸い込んだ風

の中に何が含まれていたの

か？ 水、食料、空気の複

合汚染の末にどんな結果が

あるか？ 子どもへの影響

で訪れたとの取材現場よ

り、悲しい光景だった。

風が吹いてくると息を止

めた。放射性物質を吸い込

む恐怖で神経がおかしくな

りそうだった。取材を終え

フクシマからの報告

海南 友子

後で分かった妊娠

親の苦しみ切実に



避難先の東京で親戚の家に身を寄せていた小山さんと次男

た私たちの一目散に茨城の温泉街に向かい、体を何度も洗って服を捨てた。

六月十一日。震災から三ヶ月後。私は、妊娠三ヶ月に入った。不妊治療の末の、四十歳の初産。こんなタイミングで私を母に選ぶわが子を頼もしく思つた。と同時にこの子をどう

に走るだけ」と話し、「政

府と東電の中小企業に対する対策は遅すぎる」と憤

る。夫婦とともに、親類宅や旅館を転々とする大熊町の小

山信男さん（四七）一家にも取材した。今も家族六人で会津若松市の旅館のひと間に身を寄せる小山さんは「いつ帰れるのか、そればかり

を考えている」と言う。

長男は同市の仮校舎で授業を始めた県立高に通い、中学三年の次男は高校受験を迎える。「日がたつにつ

れば、政府や東電への怒りが募るが、持つていき場がない。事故の前も後も私たち

たちの将来にどう責任をとるのか」。小山さんの憤りは、胸に痛烈に響く。

町に残す岩本さんは「悔しきれど、今は迷つてゐる暇はない。長年の顧客を逃

れ。ラジオからは津波注意報の情報。津波が車や家をのみ込む震災当日の映像が脳裏をよぎつた。

夫婦と妻の両親、二人の息子とともに、親類宅や旅館を転々とする大熊町の小山信男さん（四七）一家にも取材した。今も家族六人で会津若松市の旅館のひと間に身を寄せる小山さんは「いつ帰れるのか、そればかりを考えている」と言う。